

無料の「琴音楽指導者養成セミナー」を開講 石森康雄氏に聞く

夢の実現

「琴音楽指導者養成セミナー受講者募集」の広告を今年もいただいた。これに費やす経費と時間と労力のことを考える。1年間毎週指導、筆はセミナーで準備する、しかも無料！ありえない、と普通なら思う。だが、これは現実だ。

講師の石森康雄氏とは本誌が創刊した頃からおつきあいだ。「邦楽教育を推進する会」で、茅原芳男会長と同じように小学校の教師をしながら活動されていた。その頃から筆を普及させたいという強い思いがあることを知っている。なぜ、今、「指導者養成セミナー」なのか。

「琴は魅力的な楽器です。これをもっと多くの人に広めたい。琴は教え方によってとても簡単に弾ける楽器です。そのノウハウを、これから琴を教えようとする強い気持ちを持った人に伝えたいんです。私が家元になる？家元とは家の



石森康雄氏(手前の箏に中柱が見える)



1期生の講習風景

音楽と言えのか？」それを解消するにはどうすれば良いか考えた。押し手を必要とする絃の柱の位置に、もうひとつ、背の低い柱を置けばいい。ふたつの柱の間を軽く触れば絃は手前の低い柱に触れ、音は高くな

芸を伝承する人のことを言うのでしよう。そういうものではないし、まったくそんな気はありません。私は12年前に退職して、別段生活に困っているわけでもない。お礼なら、実力を付けることで返してほしいですね」

セミナーの開講は石森氏の夢だった。それをやっとな実現出来る時がきたのだ。

五線譜と中柱

幼い頃からピアノを弾いていた石森氏は中学2年のとき、近所の山田流の先生に筆を習うようになる。「どうして五線譜で弾かないんだろう？」試しに弾いてみると簡単だった。そして、「なんの曲だって弾けるじゃない！」。セミナーでの五線譜による指導はここまで進めることができる。

大学は国立音大の教育音楽科に入った。中柱を開発したのはその頃だった。筆は押し手の音程が狂いやすい。「これが

る。ギターと同じだ。ふたつの柱を細い棒で固定し、低い柱をほしい音程の位置にセットしておけばいい。これで、子どもやお年寄りでも身体に無理なく、正しい音で弾ける。セミナーではこの中柱も使う。(中柱は20年前に商品化され、全国の和楽器店で1500円で販売されている)

「柱の並びをドレミ調にすることも出来ますが、これだと筆の響きが失われるし、音域が狭くなります。平調子で四、六、九、斗に中柱をセットしておけば、筆の響きを保持しながら、ドレミであるうが転調であらうかがかけ押しであらうが、なんなくこなせるんです」

五線譜が読め、中柱を使いこなせるようになれば、例えばピアノの楽譜でも弾けるようになり、レパートリーがぐんと広がる。そして、筆ならではの美しい合奏が出来るようになる。では、古典は？

「古典は崩してはいけないと思っています。古典に中柱は使いません」

中柱をセットしていても、使わなければ普通の箏だ。ということは、古典の次に洋楽を演奏する場合でも、柱の移動は必要なくなる。また、押し手の後、手を離せば音は元に戻り、その残響が邪魔になることがある。中柱はそれも解消する。単純だがよく出来た道具だ。

これがあまり流布しないのは、自分だけが違うものを使うことが許されない世界だからか(あずまざわりを使う三味線界や七孔を使う尺八界とは違う)。セミナーが「指導者養成」なのはその辺にカギがありそうだ。

指導法の確立

石森氏は国立音大を出たあと、総合大学に入り直している。小学校で、音楽の先生ではなく、自分のクラスを持ちたかったから。クラスでは常に教室の後ろに筆を置いていた。学芸会やクラブ活動で筆は活躍した。調布の自宅では「邦友会琴音楽教室」を毎週土日に開いて、そこでも子どもたちや大人に筆を教えた(現在も続く)。

石森氏の指導法は、既存の箏の世界では受け入れられなかったが、それでも、学校や邦友会で培った経験を生かして指導法を確立していった。生徒達は皆喜んでくれた。女優の石原さとみが筆を趣味としているのは石森氏のもとで9年間習ったことによる。

セミナーでは様々な奏法のほか、練習器を使って糸締めや張り調整を学ばせる。「一本切れて楽屋さんを呼ぶ」というのはいかがなものでしょう。自分で出来るようになりましょう」

現在、1期生5人がセミナーを受講している。2期生の募集がいよいよ始まる。

「内緒で来る、知られるのはいや、そういう人はお断りします。周りから抵抗があればそのかわり方もお教えしましょう。正々堂々と勉強して、強い意志で新しい時代の音楽指導者になってほしいと思います」



糸締め練習器